

台湾のドキュメンタリー映画『あの頃、この時』と 金馬賞の50年

ジャーナリスト 戸張 東夫



楊力州監督。2015年11月14日東京の台湾文化センターにて撮影

台湾のドキュメンタリー映画『あの頃、この時（那時・此刻）』（2014年）はドキュメンタリー映画の第一人者である楊力州監督の最新作である。

地元台湾でもまだ公開されていない。2013年台湾の映画賞である金馬賞（Golden Horse Award）が50周年を迎えたのを記念して、台湾政府文化部（文部科学省）に依頼されて製作したもの。金馬賞の授賞式は映画人やファンの年にいちどの華やかな映画の祭典だ。会場に綺羅星のごとく集うスターたち、金馬賞を持った手を頭上に高々と掲げて小躍りする受賞者、アメリカの大物女優エリザベス・テーラーも1979年の授賞式にゲストとして登壇した。このような歴年の授賞式が次から次へ展開され、画面を明るく彩る。だがその一方で、政治的目的で作られた金馬賞が台湾内外の政治情勢や社会の変化と連動しながら、政治離れを進め、今日のような国際的な映画の祭典に変身した経緯をタブーを恐れずに語り、金馬賞の枠にとらわれずに、映画史、台湾現代史に踏みこむ厚みのある作品になった。

金馬賞は中国語圏唯一の国際映画祭

金馬賞は、今日香港の香港電影金像獎、中国の金鶏百花獎（金鶏百花映画祭）とともに中国語圏の三大映画賞と呼ばれ、しかも香港と中国の映画賞が地元の映画しか対象にしないのに対し、金馬賞は国籍に関係なく作品の参加を認める中国語圏

で唯一つ開かれた国際映画祭として重視されている。政治色の全くない映画賞である。

金馬賞の由来についてはなぜか語られることがあまりないが、もとはといえば標準中国語（台湾では国語という）を普及させるために政府が組織したのである。だが、あれから半世紀、いまや知る人も少ない。『あの頃、この時』の中に「金馬賞がなぜ金の馬（Golden Horse）なのか知らない」という若い映画ファンが登場するが、あれからすでに半世紀経った。地元台湾でも知る人は少ない。

まずここで金馬賞の背景についていささか説明しておこう。

台湾は1949年から1987年まで38年の長期にわたって戒厳令下にあった。この時期は国家の映画に対する統制、管理が厳しく台湾映画の“冬の時代”だった。映画は政治の道具とみなされていたから、政府の指示に逆らうことは出来なかった。政府がこんな要求を映画に突きつけた。「映画の中では標準中国語を使うこと、台湾語など方言は禁止する」というのである。このため台湾映画では、身分や出身にかかわらず登場人物はすべて正確で美しい標準中国語を話すことを求められた。これが台湾映画のリアリティを損なう結果となり、長い間台湾映画を悩ませた。台湾映画が標準中国語から“解放”されるには80年代の“ニューシネマ”の登場まで待たねばならなかったのである。

金馬賞は中国語普及のために設けられた

国民党当局は、もともと中国本土の政権だし、台湾を中国の一部とみなしていたから、台湾の公用語は標準中国語と早くから決めていたのである。戦後日本から台湾を接収すると、いち早く台湾省国語推

進委員会を設置、国語の普及に着手した。この活動はその後学校を通じて進められ、「すべての授業を中国語で行い、台湾語を厳禁せよ」との命令も発せられた。だが台湾の圧倒的多数を占める台湾人の母語は台湾語であり、児童、生徒はともかく、台湾全土に中国語を広めるのは容易なことではない。そこで映画に応援を頼んだということなのである。

だが当局はそれだけでは不十分と考えたのであろう。中国語推進に貢献した映画を顕彰するための映画賞を設けることになった。これが今日の金馬賞である。金馬の二文字は国共内戦の最前線にある金門島と馬祖島に由来する。両島の兵士の戦闘精神に学べというのだろう。また長い間金馬賞の授賞式は10月31日に挙行されていた。これは蒋介石総統の誕生日に当たる。つまり蔣総統の長寿を祝う意味が込められていたのである。また金馬賞が長年、中国を敵視し、排除してきたことはよく知られている。金馬賞も国共内戦を戦っていたのである。

台湾現代史に踏み込む『あの頃、この時』

『あの頃、この時』は金馬賞の50年を振り返る



金馬賞50周年記念特集を組んだ台湾の月刊誌『台湾光華雜誌』

のだから台湾映画の“冬の時代”に触れないわけにはいかない。だが、いまや21世紀だから、検閲も政府の干渉も気にせず“歯に衣着せぬ”映像でこれまでになく踏み込んで真相を明らかにしている。金馬賞についても、もともと標準中国語普及の目的で作られたことはもちろん、金馬賞の名称の由来などを語り、金馬賞が漸進的に政治色を薄め、官営から民営へと変身し、今では政治的に対立する中国の映画や映画人が参加するまでにオープンになった経緯を詳しく語っている。

映画のかなりの部分が“冬の時代”に当てられているが、“冬の時代”を告発するというより、台湾映画のこれまでの歩みを政治的、社会的背景と結びつけ、映画を通じて台湾の政治と社会の変化を考える作品になっている。これがこの作品の特徴であり、優れたところだと筆者は考えている。映画は映画を生み出した社会と切り離し難く結びついている。社会が変われば映画も変わる。映画が変われば、それは社会が変わったからだ。そんな考え方で金馬賞を中心に台湾映画の50年を振り返っているのである。台湾現代映画史であると同時に台湾現代史になっているところがとてもいい。台湾と台湾映画を理解するのにこれほど適切な映画は滅多にないであろう。

この作品のもうひとつの特徴は、映画ファンの視点を取り入れたことだ。この手の作品は得てして映画界の話になりがちなので、一般の観客にも登場してもらいたいと考えたという。映画はファンと密接な絆で結ばれている。映画はファンに支えられ、ファンは映画から夢や希望や、生きる喜びを与えられる。どんな時代にどんな映画が作られようとも、映画と民衆の関係は変わらない。そんな監督の考え方がうかがわれる。

グロテスクな真実も語る

ただ、戒厳令下の台湾の状況は、複雑で、分かりにくい。われわれ外国人の常識で理解できない



楊力州監督

ことも少なくなかった。だからこのドキュメンタリーを観ていても、その時代を経験した人でなければ分からないというところが少な

らず登場する。

たとえば映画の冒頭のシーン。中華民国の国歌が流れる。スクリーンには台湾の豊かさや近代化を誇示する画面を背景に国歌の歌詞が大きく映し出されている。国歌が終わるまでこの画面が延々と続く。長すぎるとさえ思える。だがこれにはわけがある。戒厳令下の台湾では映画館で映画を観るときは、本篇が始まる前に観客は全員起立して国歌を斉唱しなければならなかった。そのときに映されたのがこの画面なのだ。つまり観客はこの画面が映されている間は坐ることが出来なかったのである。筆者も80年代初めにこれを経験したことがある。国歌を知らなかったので、黙って立っただけだが、最初はひどく緊張したような記憶がある。

この国歌の歌詞の画面は、戒厳令下の台湾の映画を取り巻く、厳しくも、振り返ってみればどこか滑稽な状況を皮肉交じりに再現したものなのである。監督が敢えてこのシーンを挿入した意味は、いまや地元台湾の若い世代の観客には理解できないに違いない。わが国で上映する機会があれば配給会社が、何かの形で詳しい解説をつけることが望まれる。

それにしても文化部がスポンサーのドキュメンタリーにもかかわらず、こんなグロテスクな真実を語る事が出来るのだから、時代の流れを改めて感じてしまう。

楽しめた往年の名画や思い出のシーン

これは言うまでもあるまいが、この作品の最大の魅力は台湾映画そのものにある。政治だとか、歴史だとか、そんな話ばかりしてきたが、このドキュメンタリーで筆者の最大の喜びは台湾映画史の中の重要な作品を数多く観ることが出来たことである。期待に違わず往年の名作や話題作の思い出のシーンが数え切れないほどスクリーンに映し出され、胸が躍った。実に楽しかった。

唐宝雲（女優）が、長い竹ざおをたくみに使いながらアヒルの群れを追って、小川にかかった橋を渡っていく田園風景は『アヒルを飼う家』。北京を遠く離れた辺境の砂漠で刺客に襲われる石雋。武侠映画の名作といわれる『残酷ドラゴン 血斗龍門の宿』である。日本軍の捕虜になるのを潔しとせず、戦場に仁王立ちになって自刃する柯俊雄の国民党軍の張自忠中將。これは抗日映画『英烈千秋』の山場としてよく知られている。用も無いのに家々の門の呼び鈴を鳴らして逃げていく下校途中の小学生の悪ガキたち。これはニューシネマの代表作のひとつの『少年』である。それぞれわずか数秒間の映像だから、もちろんタイトルなどは後になって、思い出したものもないわけではない。だがこの思い出す“作業”も楽しみのひとつなのだ。後まで楽しめるというわけである。

* 上記四作品の原題、監督、製作年は次の通り。

- ▼『アヒルを飼う家（養鴨人家）』李行、1965年
- ▼『残酷ドラゴン 血斗龍門の宿（龍門客棧）』胡金銓、1965年
- ▼『英烈千秋』丁善璽、1973年
- ▼『少年（小畢的故事）』陳坤厚、1983年。

『あの頃、この時』に山形の映画祭で出会う

『あの頃、この時』は今年（2015年）10月山形市で開かれた山形国際ドキュメンタリー映画祭2015のときわが国で初めて上映された。映画祭

と並行して台湾文化部と山形大学人文学部付属映像文化研究所が共同で「映像は語る—ドキュメンタリーに見る台湾の光と影」というタイトルの共同企画を立てた。ここで台湾のドキュメンタリー映画十一作品を3日間で集中的に上映したのである。台湾のドキュメンタリーは、長編劇映画に伍して一般の劇場で単独公開されることも少なくない。それだけ力作が多いのである。それに台湾のドキュメンタリー十一作品を一挙に観ることができる機会は滅多にない。ファンとしては見逃すわけにはいかないところである。これら十一の作品はすべて1990年代以後の作品で、この中に楊力州監督の『あの頃、この時』が含まれていたのである。これ以外の十作品は「山形ドキュメンタリーライブラリー」所蔵の作品から選んだものだが、この中にもいくつか見ごたえのある作品を発見したので紹介してみたい。まずなぜ1990年代以後の作品を選んだのかという点だ。



台湾映画の特別企画「映像は語る—ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」の資料

政治的、社会的地殻変動始まる1990年代

台湾では1949年以来全土に戒厳令を敷いていた。この戒厳令がガンとなって、自由も、人権も認められない状況が38年間も続いていたのである。またこの時期は映画に対しても厳しい管理、統制が行われた台湾映画の“冬の時代”だった。この戒厳令が1987年に解除されたのである。1990年はその3年後だ。この時期の重さが分かるというものだ。だがそれだけではなかった。

翌1988年1月台湾のストロングマン蔣経国総統が死去し、台湾人の李登輝副総統が総統に昇格した。台湾人が台湾の最高指導者になったのはこれが初めてだったことから、台湾全土が沸き立ち、まるで革命でも起きたような喜びようだった。1990年代はスタートから台湾のこのような政治的、社会的地殻変動が広がり深まる形勢を見せていたのである。

これが作品に影響しないわけがない。山形で観た作品はどれも政府当局の不手際を告発したり、同性愛者の権利と苦悩をあからさまに大胆に描き出したり、知能障害者を主人公にしたり、というぐあい、戒厳令の時期には考えられないテーマばかりであった。

面白かったのは『陳才根的隣居們（陳才根と隣人たち）』（呉乙峰監督、1996年）、『無米楽』（葉蘭権・莊益増監督、2005年）、『青春啦啦隊（青春ララ隊）』（楊力州監督、2011年）である。いろいろな意味でよく出来た作品に思えた。

タブー取り上げた『陳才根と隣人たち』

『陳才根と隣人たち』は、台北最大の繁華街南京東路と林森北路一帯に当時密集していた不法建築のバラック集落にひっそり生きる七人の老いて独身の外省人（戦後中国大陸からやって来た人）を見つめたもの。七人とも国民党軍の軍人として台湾にやってきたものの、さまざまな理由で貧しく



楊力州監督

不自由な一人暮らしを迫られている。1987年11月台湾住民の大陸親族訪問が解禁されたため、大陸に残してきた家族と再会を果たしたり、

相互に連絡を取り始めたものもある。だが60年の歳月は家族との間の大きな溝となり、老兵の帰国をためらわせている。不法建築のバラックは近く強制撤去される。この先の当ても無く、成り行き任せの老人たち。外省人の悲哀が胸を突く。

この問題は台湾では「老兵問題」とよばれ戒厳令の時期の長い間政治的タブーとして触れることが出来なかった。

『無米楽』は「コメを作らなければ、楽しく暮せる」などこぼしながらも、水牛とともに昔ながらのコメ作りを続ける老夫婦の生き様を記録した。副業にワタを打ったりしているから、生活は決して楽ではないし、安価な輸入米も脅威になってきた。それでも朝からコメ作りに精を出し、全てをありのままに受け入れて心静かに過ごしている。台湾人の芯の強さを感じさせた。

『青春ララ隊』は、ともすれば暗くなりがちな老人問題を明るく、ユーモラスに取り上げた。高齢者は社会から邪魔扱いされ、家族に疎まれるお邪魔虫だ。事情はわが国でも変わらない。だがここに登場する人たちは違う。積極的にチアリーダーチームに参加して、ポンポンを振りながら新たな友人や生きがいを見つける。このシニアグループの平均年齢は七十歳だという。タイトルに「青春」という二文字をつけた作者の暖かいまなざしとユーモアが全篇にあふれている。さわやかな印象が残る。

当局の統制と管理に泣いた台湾映画

さて仮にこれが戒厳令の時期だったらどんなこ

とになったであろうか。

『陳才根と隣人たち』はテーマそのものがタブーであったから、企画の段階で待たがかかったに違いない。『無米楽』は機械化も出来ない貧しい農民を映画に取り上げるのは「中華民族の尊厳にかかわる」と批判されただろう。『青春ララ隊』はどうか。いい歳をして奇妙な服装でチアリーダーチームに加わってポンポンを手に踊るなど公序良俗に反する。恥を知れ！でボツか、出来上がっても検閲であちこちカットされそうだ。

若い世代の人たちにはバカバカしく思えるようなことがまかり通っていたのである。もっともいまだからバカバカシイなどと言えるが、当時の映画人にとっては身を切られるような苦痛だったのである。

*山形で集中上映した十一の作品の残りの作品は以下の通り。

- ▼『如是生活、如是 Pangcah (これぞ人生、これぞアミ族)』マーヤウ・ビーホウ、1998年
- ▼『Malakacaway 倒酒的人 (酒祭の男たち)』同、2009年
- ▼『私角落 / Corner's (コーナーズ)』周美玲、劉芸后、2001年
- ▼『雜菜記』許慧如、2003年
- ▼『25歳、国小二年級 (25歳、小学二年)』李家驊、2003年
- ▼『三叉坑』陳亮豊、2005年
- ▼『築巢人』沈可尚、2012年。

(2015年11月21日)



台湾ドキュメンタリー上映会会場となった山形市内の遊学館